

なめがた大使 小林光恵さん 書きおろしエッセイ 五感でキャッチ！ なめがた漫遊記 第29回

どんこのこと

ときどき椎茸が無性に食べたくなり、生椎茸をバター焼きにして醤油をたらしたり、大量のスライスの干し椎茸を使つて鶏ゴボウを作ったり。生椎茸の丸ごとを天ぷらにしたりもする。まぜご飯の具も椎茸多めが好み。

その割に、干し椎茸のハ干しVをハ乾しVと表記したりすることもハどんこVとは何のことなのか、も知らなかったのだ。スーパーや直売所で、箱入りのどんこ椎茸を眺めては、木製の美しい彫刻品みたい、と思つたり、ロシア民謡「ステンカラージン」の出だしの「ドンコサック」の群れに「♪などと鼻歌で歌つたり（長い間、ドン・コサックをドンコ・サックだと勘違いしていた。歌詞の意味を考えたことがなかったアホです）」した。そして私には、どんこ椎茸は高級すぎる気がして、いつも買わずにその場をあつてしまつた。

このたび、玉造椎茸部会が「日椎連乾椎茸箱物品評会」で、団体日本一の四連覇を果たしたとのこと、おめでとうございませう！それを伝える記事から、どんことは、主に干し椎茸の傘の開き具合を区別するための呼び方の一つで、どんこⅡ冬菇（傘の開きが5〜6分程度）、こうしんⅡ香信（傘の開きが7〜8分程度）、以上の中間の開き具合のものがこうこⅡ香菇に分けられていることを知つた。この中でどんこは、傘が丸く内側に巻き込み、肉厚で軸も太めだという。ちなみに、冬菇と書きどんこと読ませるのは、ハ冬Vを中国語では「ドンあるいはトン」と読むことが由来しているとか。

自分でどんこを購入・調理して食べた記憶はないが、肉厚で食べ応えがあり、形良くしておいしい椎茸をよそで何度も食したことはあり、それはどんこだったのだと思う。

先日、行方市役所のSさんと、以前（三、四十年前くらいまでだろうか）の結婚式の引き出物には、必ず折り詰めがついていたという話になった。鯛の塩焼きや天ぷらや揚げ物や何かがぎゅつと詰められていたような…。あの折り詰めも懐かしいね、と。

その折り詰めには、扇に見立てたような、黒い串が側面から刺さっているようにかんも必ず入っており、黒い土台の層の上に白い淡雪かんみいたな層があり、その上に寿という文字が載っていた。甘いだけでなく、なんとなくシヨッパイ部分があつたのは、隣に煮物などが詰められていたせいだと思われ、そこにどんこもあつたような…。Sさんに確かめてみなければならぬ。

今年、観光物産館こいこいで購入して、煮て食べてみたいとも思う。

小林 光恵さん

キノコといえば、子どもの頃、ショウロという小さくて丸いキノコを入れたまぜご飯を、母が作ってくれたことがあります。



行方市出身。つくば市二の宮在住。世代別のヒット曲を紹介するテレビ番組を見ていると、もはや全世代で一緒に歌える歌はないのかも、と寂しくなりますが、教科書に載っている唱歌なら、まだまだありそうです。

市公式ホームページ内で「行方帰省メシ」連載中。サイトはこちらから▶



地域おこし協力隊

連載コラム ②

皆さんこんにちは。地域おこし協力隊のダシカです。

モンゴルでは、学校の夏休みは6月から9月までの約3カ月間あります。その間、子どもたちは地方に住む祖父母のもとへ帰省して家畜の世話を手伝ったり、別荘へ出かけたりし、なるべく自然と触れ合いながら過ごします。

一方、今年は息子たちにとって初めて日本で過ごす夏となりました。当初は、長い夏休みをどのように過ごすかと悩んでいましたが、おかげさまで、カブトムシの生態を観察しながら楽しい夏休みを過ごすことができました。

息子たちは好奇心旺盛で、特にモンゴルではなかなか出会えない昆虫に夢中です。公民館から、昆虫図鑑を借りてくるほどの熱中ぶりです。一方の私は、昆虫について詳しいどころか、名前すらよくわかりません。

そんな中、ある日突然、次男が「カブトムシが欲しい」と言い出しましたが、私は東京に住んでいた頃も見たことがなく、どこで手に入れるのかも分かりませんでした。ある夕方、窓に「ドン」と何かがおつかり、外へ出てみると、大きな黒い虫が地面に転がっていました。よく見るとカブトムシのメスで、この思いがけない出会いをきっかけに、わが家の「カブトムシ探し」が始まりました。カブトムシのいる場所や捕まえ方、飼育方法を



▲サ・ダシカ 隊員

【令和8年2月1日〜現職】
企業誘致の際などに企業が求める人材ニーズ調査や、これまで交流を深めてきたモンゴルの自治体・教育機関と連携を図っています。本名は、サンダグドルジ・ダシツェレン

調べ、生態や食性について少しずつ分かってきました。裏庭にバナナトラップを仕掛けましたが、結果は失敗でした。

数日後、道路脇でカブトムシの死骸を見つけた「ここにはいる」と確信しました。夜に探しに行くと、オスのカブトムシを発見し、息子たちは大喜びしました。

日本の子どもたちが、なぜこれほどまでにカブトムシに夢中になるのか、実際に飼つてみて初めて分かったような気がします。さらにうれしいことに、そのカブトムシが卵を産みました。今では、幼虫がかかる日を家族みんなで楽しみにしています。

これから季節は秋へと移り変わりますが、本市ならではの秋の楽しみも見つけながら、家族でたくさん思い出をつくっていきたいと思います。

（次号は、佐藤隊員が担当します。）



▲カブトムシを手に取り、観察する次男



▲パワフルで、ケースのふたを開けて逃げてしまうこともあります